

古典和歌教材研究

——「国語総合」所載の万葉集・古今和歌集の活用——

西 一 夫

1. はじめに

本稿では、高等学校国語科必修科目の一つ「国語総合」における古典単元「和歌・歌謡」の所載されている和歌作品を取りあげて、その特質と問題点を考察する。

和歌作品は、古典文学の基層をなす韻文作品であり、古典全体においても重要な位置づけがなされている。教科書では「三大集」などと総称されることもある『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』は単元の支柱ともいえる位置を占める。しかしながら、それぞれの作品に対する教材化や扱い方には温度差が認められる。なかでも万葉集は古今和歌集と比較検討することによって、現在の和歌教材が内包する問題が顕著に表れることになると思われる。

そうした問題点をいかに克服し、よりよい教材化をおこなうのか、前稿^①で提示した考察を教科書の所載状況を通して検討をおこなう。

2. 和歌教材の現状

現行の「国語総合」(20冊^②)での和歌教材の所載状況は末尾の表1(万葉集)・表2(古今和歌集)に示したとおりである。教科書によっては単元自体が設けられておらず和歌を学習する機会がないものもあるが、そうした例外的なものを除けば、各教科書とも万葉集・古今和歌集のいずれもが教科書に存在する。以下、二つの和歌集毎に検討をおこなう。

2-1. 万葉集の所載状況

万葉集には、4500余首の中からどの作品を選び出してくるかという撰歌基準の問題がある。所載教材を巻毎に見れば、現行教科書に所載されていない9巻(7・9・10・11・12・13・16・17・18)のうち7巻(7・9・10・11・12・13・16)までは、基本的に作者未詳の巻という顕著な状況がある^③。つまり、作者が明でない作品は撰歌対象から外される傾向にあることを示す。

また教科書毎の所載歌数については、少ないもので2首、多いものでは14首と大きな開きがあり、単元全体も万葉集・古今和歌集・新古今和歌集と三大集として和歌教材とするか、歌集毎ではなく四季などの主題毎の分類にするなど扱いに相違が認められる。そうした傾向を考慮しても、現行の教科書に共通した定番作品というのは見出しがたい。ただし、定番と称しうる作品は存し

ないものの、「防人歌」「東歌」のいずれかを採用する教科書が多くを占めるという傾向は存する⁶⁵⁾。

さらに、所載歌を4期の時代区分にしたがって再構成してみるならば、各期を網羅するような状況を呈しながらも、1期の作品は8番⁶⁶⁾・20番・21番・28番の4首に限られ、4期も同様な状況にあり、大伴家持の4139番・4290番・4291番・4292番のいずれかを4期の作品として所載する傾向にある。一方、第2期では柿本人麻呂の作品を中心に選ばれているものの、特定の作品が存するとはいえない。また第3期も同様な傾向にあり、山部赤人・山上憶良・大伴旅人を中心とした代表歌人の作品が数首選ばれている。

撰歌された作品の所載状況を見るに、歌に付されている題詞（詞書）・左注を歌に伴わせず教材化がおこなわれている場合がある。本来、歌に付された題詞（詞書）・左注は歌を理解する上で重要な部分を占めるはずである。にもかかわらずそれらを捨象している状況は、学習者を十分な理解に導いていないのではあるまいか。このような教材化がなされる背景には、万葉集の題詞（詞書）・左注はすべて漢字で記された難解なものであり、理解が十分に及ばないと判断があるのかもしれない。確かに、3社の教科書が所載する山上憶良の「子等を思ふ歌」（5・802～803）には、題詞の他に漢文の序が付されているにもかかわらず、序を載せる教科書は皆無である。同様な状況は大伴家持の歌（19・4139）にも認められ、題詞をもあわせて教材化されている場合（012・020）と省略してしまう場合（001・013）の両用がある。この歌の題詞は歌を理解する上では重要な役割を担っていると考えられ、続く4140番歌とあわせて読むことによって十分な理解が得られる作品なのである⁶⁷⁾。

さらに所載されている万葉集歌を見るに、本来はすべて漢字で表記されていた歌が漢字仮名交じりで記され、漢字のみで記された原文を知る機会ほとんどないと言っていい状況にある。教科書の出典紹介（作品紹介）や国語便覧では「万葉仮名」の紹介・説明はあるものの、教材との関連が十分に配慮されているとはいえず、あくまで漢字仮名交じりの作品を解釈することに主眼がある。また教材の歌の脇に古写本の写真を掲載するものの、作品との関係に注意を促すことはない⁶⁸⁾。

万葉集の歌を理解するには、漢字でいかに表記されているか、という点が重要であって、さらに表記手段（文字）を持たなかった先人がいかにして自らの言語（和語）を表記しているかを知る手がかりが漢字で書かれた原文なのである。原文を併用しながら万葉集の歌を読むことによって言葉（和語）の意味と漢字が示す意味とを有機的に統合していることが理解され、漢字の意味（音訓の問題など）について生徒が理解を深めるために有効に活用できる発展的要素をはらんでいる⁶⁹⁾。

日本最古の和歌集として多くの教科書で教材化がなされながらも、万葉集の特質などを十分に活かした教材化までには至っていないというのが現状のようである。

2-2. 古今和歌集の所載状況

約1000余首を納める古今和歌集の所載状況は表2に示したとおりである。歌毎の分類（巻立て）

を大まかに示しておいたが、万葉集と比較して顕著なのは、四季と恋の部立てには、ほぼ定番と
いえるような作品が存在することであろう。これらの部立ては古今和歌集の基本構造をなす巻
である。春の部であれば「袖ひちて」(1・2)あるいは「ひさかたの」(2・84)のいずれか、
夏の部は「五月待つ」(3・139)、秋の部は「秋来ぬと」(4・169)、冬の部は「山里は」(6・
315)、恋の部は「思ひつつ」(12・552)といった作品が挙げられる。つまり、四季と恋の部立て
を代表する作品をといて明確な意識のもとで撰歌がおこなわれていると推察しうる状況にある。
これは万葉集の成立に際して、終始一貫した編纂がおこなわれておらず漸次的に成立してきた経
緯があり¹⁰⁰、一方、古今和歌集は明確な編纂方針のもとで成立している違いによるのだろう。ま
た古今和歌集は全20巻が緊密な構造体をなしている¹⁰¹ことも部立てを代表する和歌を選び出すこ
との要因として挙げられよう。

このような構造面から認められる撰歌の様相に加えて、作品の所収状況において特徴的なのは、
万葉集では省略がおこなわれる傾向にあった詞書(題詞)・左注の多くが和歌集に所載されている
ままにおこなわれている点である。和歌を理解する上で、その作歌状況が詞書によって説明され
ているという状況にあるからであろう。ふたつの和歌集でこのような違いが生じているのは、そ
れぞれの和歌集での呼称にも要因の一端が示される。万葉集の「題詞」は題としての意識を全面
に立てた呼称であって、古今和歌集では和歌の状況説明の働きを有する存在として「詞書」はあ
ると思われる。さらに古今和歌集が仮名の発達とともに展開してきた表現方法の拡大と密接な関
係にあることも見逃せない事実であろう¹⁰²。

教材化作品に極端ともいえる偏りが認められるのは、古今和歌集成立の平安時代初期に形成さ
れてきた美意識が、現在まで共通に理解できる美意識の基準をなしていることにあるのではある
まいか。それぞれの季節を代表するような作品が古今和歌集時代を代表し、かつ現代でも十分に
理解できる内容であるとの理解が働いていると思われる。この傾向は、万葉集での教材化作品に
顕著な偏りが見られないことと対照的である。

2-3. 和歌集の比較から見えてくるもの

ふたつの和歌集を検討の俎上にのせることで両者の教材化の相違は明瞭になった。その相違は
様々な要素を含み持つのだが、和歌集の構造や成立に関わる部分、和歌集が書記されている言語
であるという問題など多岐にわたる。後者の問題はすでに小稿¹⁰³でも万葉集の作品をどのように
理解するかという観点から述べた。また古今和歌集が内包する問題については小松英雄氏の緻密
な考察¹⁰⁴がある。小松英雄氏もすでに指摘しておられるように、仮名文の発達は和文の複線構造
を実現し、和歌の修辞の発達に大きな影響をあたえている。前者が含み持つ問題は、個々の和歌
の問題にとどまらず、和歌集全体の問題として理解しなくてはならない。つまり、単元を和歌集
の理解として成り立たせるのか、和歌集の名歌を理解することに主眼を置くのかによって単元の
意義は異なると言わざるを得ない。換言すれば、文学史としてどのようにそれぞれの和歌集を位
置付けるかという問題にもなる。各教科書が作品毎に出典紹介(作品紹介)において、作品をど

のように紹介しているのかという点と関連する問題であり、文学史理解とも関わるといえよう。

「和歌・歌謡」という単元設定も所載作品を見ることから、和歌集の理解よりも所載されている名歌撰の理解といった状況にならざるを得ない状況があきらかである。このような状況を改善し、「和歌・歌謡」単元をより充実し、かつ他の単元との関連を意識させようかという問題は、文学史的な観点からそれぞれの和歌集を捉え直すことから導かれうるのではあるまいか。作品の精読や文法理解に中心を置く古典の単元設定から、文学史理解の一端として「和歌・歌謡」の単元を位置付け直すことが可能であるように思われる。

3. 文学史理解から捉え直す

すでに問題としてきたように万葉集と古今和歌集との教材化の相違から見てくるものの一つとして、文学史理解から和歌を捉えるとする姿勢が十分におこなわれていないという現状がある。このことを考えるにあたって、各教科書の出典紹介（作品紹介）での二つの和歌集の位置づけを確認することから始めたい。その代表的なものの一つとして019『国語総合』（第一学習社）の紹介文を掲げる。

【万葉集】歌集。二十卷。八世紀後半にほぼ成立。……七世紀から八世紀にかけての約百五十年間の、貴族から農民までさまざまな階層の人々の歌が集められている。歌風は清新・素朴で、枕詞、序詞、対句、反復などの技巧が用いられている。

【古今和歌集】最初の勅撰和歌集。二十卷。……春・夏・秋・冬・恋・雑などの部立のもとに整然と配列され、その後の勅撰和歌集の範となった。歌風は繊細・優雅で理知的傾向が強く、掛詞、縁語、見立て、擬人法などの技巧が駆使されている。

歌集の成立・概要と作者、さらには歌風についての記述を主な内容としている。各教科書も分量の差こそあれ、これらの内容をもとにした記述と判断できる。

これらの紹介文の特色として、万葉集は作者が広範囲に及んでいる点を指摘することであり、古今和歌集は和歌の配列に言い及んでいる点が挙げられる。またいずれの紹介文にも共通しているのは具体的な修辞技巧についての指摘がある点である。このような技巧に対する指摘は、「学習」項目にも関連し、和歌学習の目的を考える際に留意されるべきである。

教科書が設定する学習項目の概要は、以下のようである（取要）。

【004国語総合】

1 音読 2 歌の主題把握 3 歌に込められた心情把握 3 万葉集の特徴（万葉）

1 音読（万葉との違い） 2 季節歌の詠まれ方 3 阿部仲麻呂歌と土佐日記との読み比べ

4 恋歌、雑歌の心情把握 5 古今集の特徴（古今）

【012精選国語総合】

1 音読 歌の主題 3 自然詠, 人事詠の選歌理由記述 4 修辞技巧の効果 5 三大集の歌風の整理 6 文法 (三集一括)

【019国語総合】

1 歌における素材の働き 2 人事の歌に込められた心情 (万葉)

1 修辞技巧について 2 素材 (月・花) の扱い方 (古今)

修辞技巧の学習 (下線部) は, 和歌学習の主要な項目の一つと数えられよう。また歌に込められた心情把握 (波線部) も学習項目として重要な位置にある。つまり, 和歌学習の眼目は個々の和歌の修辞技巧を理解して和歌全体の修辞に対する理解を深め, 和歌に込められた心情を正確に把握することにあるといえよう。

加えて, 古典和歌を考えるにあたって, 国語学習便覧での和歌集の扱いについても目を向けなくてはならない。2種の国語学習便覧では, 次のような解説がおこなわれている。

【新版新訂総合国語便覧 (第一学習社)】

『万葉集』

内容・構成 作者は天皇から庶民まで, 時代も幅も十六代仁徳天皇から四十七代淳仁天皇の代までの数百年, 地域も陸奥国から筑紫国に及ぶ。……

史的評価 文学意識を持った初の記載文学として文学史上に高い位置を占める。創作文芸中, 最も早く完成した和歌の揺籃期から爛熟期までを含み, また, 集団の文芸から個の文芸へと移り変わっていく過程を示す。……

『古今和歌集』

内容・構成 二十巻, 約千百首からなる。……歌の配列も巧みで, 四季の部では季節の推移に従って素材を配列するなど, 配慮が行き届いている。

史的評価 漢詩文全盛から国風尊重へ時代の流れを変えた最初の勅撰和歌集として, 後世まで最も尊重された。韻文・散文を問わずのちの文学に与えた影響は大きく, 歌の規範とされた。また仮名で書かれた書物が公的な性格を与えられたことは, 平安文学にとっても重要な意味を持つ。……

【新国語要覧 (増訂第4版) (大修館書店)】

『万葉集』

内容 漢字の移入は国語表記を自由にし, 集団的口誦歌謡から個人の創作としての和歌への発達を促した。大和政権の国家基盤が整い, 大陸文化の流入が古代日本人の生活や意識も変化させる時代の流れとも呼応しつつ, 現存最古の『万葉集』は誕生した。

古代からの伝誦歌を除いて一三〇年間以上の, 天皇・皇族から無名の庶民層に至るまでさまざまな階層の, 当時の大和政権の支配の及んだほぼ全域ともいえる筑紫から陸奥までの, 和歌約四五〇〇首を, 全二十巻に収録している。

『古今和歌集』

概説 平安時代初期、九世紀までの宮廷社会は中国文化の影響が強かったが、しだいに文化の国風化が進む。伝統的な和歌も貴族間の文芸として復活する。自由な表現を可能にした仮名文字が発達した九世紀後半には、単純で類型的な従来の詠風を脱して、「六歌仙」などの个性的で優れた歌人も現れた。彼らは、縁語や掛詞などの技法を駆使して繊細な感覚・心情を表現する新風を導いた。それがやがて、「古今調」として確立するのである。

内容 ……各巻とも、時間の推移や種々の段階・順序に沿って配列するなど、有機的な関連を持たせ、歌集全体を王朝生活・風俗の一大絵巻風に仕立てている。

国語学習便覧での扱いも教科書での紹介文と基本的に同様である。

このような学習内容達成のために、各和歌集を代表する「名歌」が撰歌されていることになる。つまり、和歌教材の単元は詞華集（アンソロジー）として編集されているとも言い得るのである。しかし、詞華集ではそれぞれの「和歌集」が有する特徴を十分に理解できず、単に和歌の解釈と修辞技巧の理解に止まってしまうおそれがある。万葉集については、その撰歌に際して斎藤茂吉『万葉秀歌』（岩波新書）が参照されてきた点はすでに指摘がある⁽⁴⁹⁾。現行の国語総合所載の和歌を『万葉秀歌』に採られている短歌と比較すれば、その多くが『万葉秀歌』にすでに認められる。だが、教科書で多く採用される「防人歌」は、そのほとんどが『万葉秀歌』に採用されていないのである。前掲の品田氏の著書にも指摘があるように、秀歌採用の基準にアラragi会員の意向が反映している点をも考慮すべきであろう。とはいえ、教科書での撰歌基準として『万葉秀歌』の存在は大きく、その意図するところは、「本書はそのような標準にしたが、これは国民全般が万葉集の短歌として是非知って居らねばならぬものを出来るだけ選んだ」（上巻・序）と明記されることから、詞華集としての性格を先鋭化していると理解できる。

このような教材の傾向と歌集が本来有する意図、つまり、編纂された総体としての和歌集（万葉集・古今和歌集）が示す内容とは相違すると思われる。教科書の紹介文や国語便覧での記述からあきらかなように、古今和歌集が有する和歌配列の特色を完全に捨象しているのが現状⁽⁵⁰⁾である。万葉集では歌相互の関係などに対する留意を促すものは存しないのが現状である。万葉集の歌の配列については、伊藤博氏が、

……萬葉歌百三十年の時代が、平安朝において分化されてくる和歌的世界（古今的世界）と物語的世界（伊勢物語的世界）を導く祖の時代であること、いいかえれば、平安朝文学の総体を導く巨大な時代として萬葉歌一世紀半の歴史が存在するということが考えられてくる。

（「萬葉の中の文学史」『萬葉のあゆみ』塙書房）

と強調するように、平安文学へと連続する存在として万葉集の作品は位置付けられるのである。万葉集は古今和歌集のような全体を緊密な構造体と捉えることは出来ないけれども、伊藤博氏が提唱したような歌群としての数首のまとまりを持つ歌集なのである⁽⁵¹⁾。

詞華集としての和歌教材にとどまることなく、和歌集相互の関連や物語教材との連携を意識し

ながら有機的に教材配列を試みてゆくことが求められるであろう。単元毎に個々の文学作品が分断されてしまい、相互の関連などに触れる機会なく読解中心の古典授業が続けられている。文学史に対する配慮もさらなる留意によって時代的な展開を踏まえて作品理解を深めることへとつながる。

4. 小結

和歌単元は単に個々の和歌を解釈するのみならず、様々な活用が可能な要素を胚胎していると考えられる。だが、和歌教材は大学入試に重要な位置を占めない、との意識が現場に根強い。そうした意識を払拭し、多角的に教材を組み合わせ和歌教材を活用することで言語意識を喚起し、さらには現代の我々の考え方の根幹へも迫る取り組みが可能となるであろう⁽⁹⁾。このように縦横に活用可能な教材であると同時に歌集本来の特徴を視野に収めた教材化が求められているのが「和歌・歌謡」単元なのである。

和歌は長い歴史の中で連綿と受け継がれてきた文芸であり、我々の心情を吐露する手段として用いられ今日に至る命脈を保つ。そうした時代時代の歌人たちが磨き上げた芸術作品は優れた言語芸術であり、国語の表現を磨く上で重要な働きをしてきた。さらには、その和歌で磨かれた言語への美意識は散文にも取り込まれている。単発的に和歌を扱い解釈し修辞技巧にばかり目を向けるのではなく、より有効な方策をさらに模索していく必要があるだろう。ここで示した分析と文学史的理解による教材活用は、その一つの試案である。

表1 万葉集

凡例：1. 調査項目は「漢字仮名交じり本文」「題詞・左注」「作者」「漢字の原文」の4点。これらの所載状況を、以下の4つのパターンに分類して示す。

- a：すべてが揃う
- b：「題詞・左注」「漢字の原文」なし
- c：「作者」「漢字の原文」なし
- d：「題詞・左注」「作者」「漢字の原文」なし
- e：「漢字の原文」なし

2. 斎藤茂吉氏『万葉秀歌』に所載されていない作品には網掛けを施した(ただし長歌には施さない)。

001新編国語総合：b(3・226近江の海, 19・4139春の苑)(東京書籍・所載歌数2首)注1

002精選国語総合：e(1・20あかねさす, 1・21紫草の, 2・221去年見てし, 3・317天地の, 3・318田子の浦ゆ, 3・337憶良らは, 3・338験なき, 14・3329多摩川に, 19・4290春の野に, 20・4346父母が^が)(東京書籍・所載歌数10首)

004国語総合：e(1・20あかねさす, 1・21紫草の, 2・221去年見てし, 3・317天地の(長歌), 3・318田子の浦ゆ, 3・337憶良らは, 3・338験なき, 14・3329多摩川に, 19・4290春の野のに, 20・4346父母が^が)(東京書籍・所載歌数10首)

006国語総合：b(6・925ぬばたまの)

e(1・20あかねさす, 1・21紫草の, 3・226近江の海, 5・802瓜食めば(長歌), 5・803銀も, 19・4290春の野に)(三省堂・所載歌数7首)

007新編国語総合：注2

008国語総合：b(1・30ささなみの, 6・919若の浦に)

- e (1・8 熟田津に, 1・28 春過ぎて, 2・142 家にあれば, 3・270 旅にして, 3・338 駿なき, 5・802 瓜食めば(長歌), 5・803 銀も, 14・3459 稲つけば, 15・3724 君が行く, 19・4292 うらうらに, 20・4322 我が妻は, 20・4425 防人に) (教育出版・所載歌数14首)
- 009 新国語総合: a (8・1424 春の野の [西本願寺本を併載])
 e (1・20 あかねさす, 1・21 紫草の, 2・141 磐代の, 3・226 近江の海, 6・978 土やも, 14・3329 多摩川に, 19・4290 春の野に, 20・4346 父母が) (教育出版・所載歌数9首)
- 010 国語総合: b (1・20 あかねさす, 1・48 ひむがしの, 3・317 天地の(長歌), 3・318 田子の浦ゆ, 19・4139 春の苑, 20・4401 韓衣)
 e (14・3329 多摩川に) (大修館書店・所載歌数7首)
- 011 新編国語総合: b (2・142 家にあれば, 3・255 天離る, 3・318 田子の浦ゆ, 20・4401 韓衣) (大修館書店・所載歌数4首)
- 012 精選国語総合: b (3・226 近江の海, 6・924 み吉野の)
 e (1・20 あかねさす, 2・205 我が背子を, 3・452 妹として, 14・3329 多摩川に, 19・4139 春の苑) (明治書院・所載歌数7首)
- 013 新編国語総合: b (1・48 ひむがしの, 3・318 田子の浦ゆ, 3・452 妹として, 4・448 君待つと, 14・3459 稲つけば, 19・4139 春の苑) (明治書院・所載歌数6首)
- 014 国語総合: e (1・8 熟田津に, 3・226 近江の海, 3・337 憶良らは, 14・3329 多摩川に, 19・4291 わがやどの, 20・4425 防人に) (右文書院・所載歌数6首)
- 015 国語総合: b (20・4425 防人に)
 e (1・28 春過ぎて, 2・208 秋山の, 5・893 世の中を, 6・994 振りさけて, 8・1418 石走る, 8・1639 淡雪の, 15・3724 君が行く) (筑摩書房・所載歌数8首)注3
- 017 精選国語総合: e (1・20 あかねさす, 3・226 近江の海, 5・822 わが園に, 5・893 世の中を, 6・924 み吉野の, 8・1500 夏の野の, 14・3329 多摩川に, 15・3724 君が行く, 19・4292 うらうらに, 20・4346 父母が) (筑摩書房・所載歌数10首)
- 018 国語総合: a : (1・20 あかねさす [西本願寺本を併載])
 c (3・337 憶良らは, 8・1418 石走る, 14・3329 多摩川に, 20・4425 防人に) (旺文社・所載歌数5首)
- 019 国語総合: d (14・3329 多摩川に, 20・4401 韓衣)
 e (1・8 熟田津に, 1・48 ひむがしの, 5・802 瓜食めば(長歌), 5・803 銀も, 6・919 若の浦に, 8・1511 夕されば, 19・4292 うらうらに) (第一学習社・所載歌数9首)
- 020 標準国語総合: e (1・28 春過ぎて, 2・142 家にあれば, 4・496 み熊野の, 8・1552 夕月夜, 8・1639 淡雪の, 19・4139 春の苑) (第一学習社・所載歌数6首)注4
- 021 新編国語総合: 注5
- 022 展開国語総合: b (1・20 あかねさす, 1・28 春過ぎて, 3・226 近江の海, 3・318 田子の浦ゆ, 3・337 憶良らは, 3・338 駿なき, 8・1418 石走る, 14・3329 多摩川に, 15・3724 君が行く, 19・4292 うらうらに, 20・4425 防人に) (桐原書店・所載歌数11首)
- 024 探求国語総合: c (14・3329 多摩川に, 20・4425 防人に)
 e (1・20 あかねさす, 1・21 紫草の, 2・131 石見の海(長歌), 2・132 石見のや, 2・133 笹の葉は, 3・226 近江の海, 3・337 憶良らは, 3・338 駿なき, 8・1418 石走る, 19・4292 うらうらに) (桐原書店・所載歌数12首)

注1. 001は大岡信「折々のうた」として所載。

注2. 007の和歌教材は「百人一首」を取りあげる。

注3. 015は全体を「四季の歌」「恋の歌」「人生の歌」に分けて歌集を解体して編集する。

注4. 020は全体を「春」「夏」「秋」「冬」「旅」「恋」に分けて歌集を解体して編集する。

注5. 021は「和歌・歌謡」の単元が設けられていない。

表2 古今和歌集

凡例：調査項目は「漢字仮名交じり本文」「詞書・左注」「作者」の3点。これらの所載状況を、以下の3つのパターンに分類して示す。

a：すべてが揃う b：「詞書・左注」なし c：「作者」なし

- 001新編国語総合：b(夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと)(東京書籍・所載歌数2首)注1
- 002精選国語総合：a(春・2袖ひちて、夏・139五月待つ、冬・315山里は、冬・337雪降れば、恋・553うたたねに、恋・751冬枯れの、雑・879おほかたは、雑・956世を捨てて)(東京書籍・所載歌数8首)
- 004国語総合：a(春・53世の中に、春・89桜花、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、秋・304風吹けば、冬・337雪降れば、羈旅・406天の原、恋・478春日野の、恋・552思ひつつ、雑・933世の中は)(東京書籍・所載歌数10首)
- 006国語総合：a(春・2袖ひちて、春・53世の中に、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、恋・552思ひつつ、恋・756あひにあひて、雑・942世の中は)(三省堂・所載歌数7首)
- 007新編国語総合：注2
- 008国語総合：a(春・27浅緑、春・41春の夜の、春・84ひさかたの、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、冬・315山里は、離別・404むすぶ手の、恋・478春日野の、恋・552思ひつつ)(教育出版・所載歌数9首)
- 009新国語総合：a(春・2袖ひちて、秋・277心あてに、冬・315山里は、恋・469ほととぎす、恋・797色見えて、哀傷・861つひに行く)(教育出版・所載歌数6首)
- 010国語総合：a(春・84ひさかたの、秋・169秋来ぬと、冬・315山里は、恋・552思ひつつ)(大修館書店・所載歌数4首)
- 011新編国語総合：a(春・2袖ひちて、秋・169秋来ぬと、恋・552思ひつつ)(大修館書店・所載歌数3首)
- 012精選国語総合：a(春・2袖ひちて、夏・139五月待つ、冬・315山里は、羈旅・406天の原、恋・552思ひつつ)(明治書院・所載歌数5首)
- 013新編国語総合：b(秋・169秋来ぬと、冬・337雪降れば、恋・469ほととぎす、恋・552思ひつつ)(明治書院・所載歌数4首)
- 014国語総合：a(春・2袖ひちて、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、冬・315山里は、恋・552思ひつつ)(右文書院・所載歌数5首)
- 015国語総合：a(春・117宿りして、夏・157暮るるかと、秋・193月見れば、冬・337雪降れば、賀・349さくら花、恋・469ほととぎす、恋・552思ひつつ、雑・967光なき)(筑摩書房・所載歌数8首)注3
- 017精選国語総合：a(春・56見渡せば、春・89桜花、秋・304風吹けば、冬・330冬ながら、賀・349さくら花、羈旅・409ほのぼのと、恋・478春日野の、恋・553うたたねに、恋・751冬枯れの、哀傷・829泣く涙)(筑摩書房・所載歌数10首)
- 018国語総合：a(春・2袖ひちて、春・84ひさかたの、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、羈旅・410唐衣、恋・552思ひつつ)(旺文社・所載歌数6首)
- 019国語総合：a(春・2袖ひちて、春・53世の中に、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、冬・315山里は、羈旅・406天の原、恋・552思ひつつ、哀傷・847みな人は)(第一学習社・所載歌数8首)
- 020標準国語総合：a(春・2袖ひちて、夏・157暮るるかと、秋・169秋来ぬと、冬・337雪降れば、離別・391君が行く、恋・553うたたねに)(第一学習社・所載歌数6首)注4
- 021新編国語総合：注5
- 022展開国語総合：b(春・2袖ひちて、春・84ひさかたの、夏・139五月待つ、秋・169秋来ぬと、秋・193月見れば、冬・315山里は、恋・469ほととぎす、恋・552思ひつつ)(桐原書店・所載歌数8首)

024探求国語総合：a(春・2袖ひちて，春・53世の中に，夏・139五月待つ，秋・169秋来ぬと，冬・315山里は，離別・404むすぶ手の，恋・552思ひつつ，雑・933世の中は)(桐原書店・所載歌数8首)

注1. 001は大岡信「折々のうた」として所載。

注2. 007の和歌教材は「百人一首」を取りあげる。

注3. 015は全体を「四季の歌」「恋の歌」「人生の歌」に分けて歌集を解体して編集する。

注4. 020は全体を「春」「夏」「秋」「冬」「旅」「恋」に分けて歌集を解体して編集する。

注5. 021は「和歌・歌謡」の単元が設けられていない。

注

- (1) 小稿「漢字学習指導の一方法—漢字と和語(日本語)との対応から—」(『人文科教育研究』第31号2004・8月)
- (2) 以下，教科書を引用する場合は3桁の教科書番号を併記して用いる。
- (3) 残る2巻(17・18)は，いずれも「家持歌日誌」と称される一部をなす巻であり，所収作品の多くが大伴家持の作品となる。家持の作品は巻19から撰歌されており，作者未詳の巻と同列に扱うことは出来ない。
- (4) ただし，東歌を収める巻14は，すべて作者未詳であるが，万葉集の特徴を示す上から，多くの教科書が選歌対象としてきたと考えられる。
- (5) 「防人歌」「東歌」のいずれもが所載されていない教科書は，001「新編国語総合」(東京書籍)・006「国語総合」(三省堂)・020「標準国語総合」(第一学習社)の3冊。いずれかが所載されていない教科書は，012「精選国語総合」(明治書院，東歌のみ)・013「新編国語総合」(明治書院，東歌のみ)の2冊。
- (6) 以下，万葉集の歌を引用する場合に付す歌番号は「国歌大観」による。また古今和歌集は「新編国歌大観」の歌番号による。
- (7) 注①小稿で具体的な作品理解について触れた。
- (8) 009・018では所載和歌作品に古写本(西本願寺本万葉集)の写真を併せて掲げるが，その活用について特に触れない。
- (9) 注①小稿を参照。
- (10) 万葉集の成立については，伊藤博氏『古代和歌史研究』(全8冊，塙書房)で詳述されている一連の成立論に拠る。
- (11) 特に四季部の構造については，新井栄蔵氏「古今和歌集四季部の構造についての一考察」を参照。
- (12) 古今和歌集の和歌が有する問題に関しては，小松英雄氏の一連の著書を参照(『古典和歌解説—和歌表現はどのようにして深化したか—』2000年10月，『仮名文の構文原理「増補版」』2003年6月，『みそひと文字の抒情詩—古今和歌集の和歌表現を解きほぐす—』2004年2月，以上すべて笠間書院)。

- (13) 注①の小稿を参照。
- (14) 注⑫で紹介した小松英雄氏の諸論考を参照。
- (15) 品田悦一氏『万葉集の発明 国民国家と文化装置としての古典』（新曜社、2001年2月）
万葉享受の歴史は数々の名著を生み出したが、意義ある書を一点だけ挙げよと言われれば、私はためらわず斎藤茂吉『万葉秀歌（上・下）』（初版一九三八年，四一刷改版一九六八年，岩波新書）を選ぶ。岩波新書発刊と同時に世に出た同書は、以来、六十年以上にわたって版を重ね続けている。……現在までの発行部数はおそらく百万を超えているものと思われる。しかも、多くの国語教科書が万葉歌の採否の目安を同書に求めてきたという事情もあるから、間接的な影響力はそれこそはかり知れないものがある。（中略）
『万葉秀歌』に選出された万葉歌は計三六五首で、これは『万葉集』全体の約八パーセントに当たるが、長歌は初めから対象外とされていて、そのほかにも、たとえば『万葉集』に一三〇首あまりある七夕の歌は一切収録されていない。……同時に、当時のアララギ会員一般の意向も汲み上げられてたらしい。……この（万葉集百首選）のリストと『万葉秀歌』の採歌状況とのあいだには明白な相関があるから、茂吉はこれをもとにして「国民全般が万葉集の短歌として是非知って居らねばならぬもの」を選んだと見てよい。
- (16) 古今和歌集の配列について教材への配慮を示しているのは、019「国語総合」020「標準国語総合」（第一学習社）が発展的学習として春の季節歌の学習（1頁）を取りあげている。
- (17) 伊藤博氏の歌群に基づく歌の解釈は、『萬葉集釋注』（集英社）に展開されている。なお、歌群を利用した和歌学習の実践例は、注①小稿参照。
- (18) 言語感覚を磨くことに重点を置いた取り組みの一端として、リービ英雄氏『英語で読む万葉集』（岩波新書、2004年11月）を活用した英語との取り組みがあげられる（試行中）。また現代文教材として高等学校3年次対象の『現代文2』（大修館書店）に所載されている川上弘美氏「離れない」の桜の叙述に関する理解に、古今和歌集の桜歌群を用いることで桜に対する日本人の意識を探ることなどに活用できる。

付記：小稿は、日本国語教育学会高等学校部会第48回研究会（平成17[2005]年5月14日，於：東京学芸大学附属高等学校）における研究発表「古典和歌の教材化を考える―「国語総合」を中心に」に基づく。席上、諸先生方より貴重な御意見・御教示を頂戴した。末尾ながらここに感謝申し上げる。